

天德山龍泉院

東堂惟名宏雄老師

令和二年
口宣

第二三号

龍泉院參禪會

「口宣」……師が学僧に与えるいましめ

当龍泉院では、坐禪の冒頭に椎名老師の短い示誨があります。内容は、『正法眼藏』、『正法眼藏隨聞記』、『傘松道詠集』、『宝慶記』、『典座教訓』、『三百則』、『坐禪用心記』などからの宝石のような一節をとり上げて、わかり易い教訓として下せられます。このご老師の「口宣」を拝聴しますと、正身端坐して坐ろうと心から思います。

龍泉院 雲堂 常規

- 一 雲堂は公界くわいの道場にして常に開放を惜します
- 一 古教照心して仏祖の威儀作法を重んずべし
- 一 古參は範がんを示し初心はこれに倣がくらひ、乳水の如く和合すべし
- 一 談笑を許さず所作低声たるべし
- 一 鳴らし物には従らに手を触れるべからず
- 一 淨潔じきよくを宗とし清掃を重んずべし
- 一 身命は無常なり常に光陰を惜しうべし

「口宣」 目次

もし山の運歩を疑著するは 自己の運歩をもいまだしらざるなり — 『正法眼藏』「山水経」 —	7
高處は高平 低處は低平 — 『典座教訓』 —	9
閑らに過ぐす月日は多けれど 道を求むる時ぞすくなき — 『傘松道詠集』 —	11
出身は猶お易きも 脱体に道うは応に難かるべし — 『三百則』 —	13
谿聲耳に入り月眼に到る 此の外更に何の用心をか須いん — 『永平広録』 —	15
坐禪の中に於いて衆生を忘れず 衆生を捨てず 乃至昆虫にまでも常に慈悲を給い — 『宝慶記』 —	17
一波纔に動けば萬波随つて來り 心識纔に起れば萬法競い来る — 『坐禪用心記』 —	19
仏道は初發心のときも仏道なり 成正覺のときも仏道なり 初中後ともに仏道なり — 『正法眼藏』「説心説性」 —	21
仏祖は身心如一なるがゆゑに 一句両句 みな仏祖のあたたかなる身心なり — 『正法眼藏』「行持」 —	23
初發心のときも仏道なり 成正覺のときも仏道なり — 『正法眼藏』「説心説性」 —	25
無常迅速なり 生死事大なり — 『正法眼藏隨聞記』 —	27

もし山の運歩を
疑著するは

自己の運歩をも

いまだしうづるなり

もし山の運歩を疑著するは

自己の運歩をもいまだしらざるなり

『正法眼藏』「山水經」の中の一節であります。

「山水經」というきれいな名前の一巻があります。山と水というもので大
自然を象徴しており、山とか水の持つ大変な功德、有難さを余すところなく
説明されている。いわば、自然の風物が人間に對して大変な包容力、命の源
泉を与えて下さっている、ということを説き示されている一巻であります。

その山水經の中に、「もし山の運歩を疑著…」、山や水のはたらきというも
のを分からぬで疑うたちは、「自己の運歩をも知らざるなり」、自分自身
の歩み、足の運びということも未だ分かつていい、ということになる。言
葉の意味はただそれだけで、運歩というのは歩くことであります。山が歩い
てていることが分からなかつたら自分の歩みも分かつていい。

「山の運歩」ということは、元々宋の時代の曹洞宗のお祖師様で芙蓉道楷ふようじどうかい
禪師という道心・道念の厚い方が、「青山常に運歩」という有名な言葉を残
されている。道元禪師はそれをひかれて「もし山の運歩を疑著するは、自己
の運歩をもいまだしらざるなり」と仰つた。「青山とは青々とした木々に覆
われていて山」という意味ですが、山全体は泰然として動かない「不動の実
体」を象徴しているのであります。つまり、坐禅の当體です。それが常に動
いている、足を運んでいるということが、実は止まつていながら大きな偉大
な活動を象徴しているといわれている。泰然として自若している山が、その

今までいながら偉大な活動を示しているという意味にとれるのであります。
だから、自分が歩けば山も歩く、自分が歩かなければ山も歩かないのです
ます。

イスラム教の教祖マホメットが人々に山を動かして見せるといい、一声
「山動け！」と叫ばれたが、山は動かない。次の日も、その次の日も「山う
だけー！」と呼ばれたが、山は動かなかつた。このため人々があつけにとら
れています。マホメットは「山は動かないのう、それではわしの方から山へ
行こう」と言つて、すたすた歩きだした。これが一つのエピソードとして伝
えられています。東洋においては“自分が歩けば山も歩く”というのがその根
底にある考え方で、これを実践したのがマホメットです。何やら禪の公案に
通じるものがあります。

でありますから、山の動き、歩きというものを疑う人間は、自分の歩くと
いうことも全然わかっていない。こうした含蓄のあるお言葉であろうかと思
います。要するに、泰然自若として不動の坐禪の実践の中に、偉大な活発な
動作活動を秘めているのが禪行であります。

「もし山の運歩を疑著するは

自己の運歩をもいまだしらざるなり

令和二年一月二六日 合掌

高
处
は
高
平

低
处
は
低
平

高処は高平 低処は低平

『典座教訓』の中のお言葉であります。『典座教訓』は典座の役職の方に對する心構え、注意事項が中心になって書かれたものであります。がそれだけではなく、典座のエピソードや典座職の色々なお勤めに関連した事項が数多く書かれており、単に典座だけでなく修行僧が日常生活を送るための心構えや行が各所に伺える、素晴らしい禪門の一つの傑作であります。

その『典座教訓』の中に「高処は高平 低処は低平」という言葉が述べられています。これは典座を勤める者はいやしくも、様々な寺院の什物や調度品を扱う。然し、その什物やら調度品を典座の職が終わつてから、それらが在るべき処にキチソト整えられて収納することが、使用する前よりもむしろ大切であるということが語られている。この言葉の続きは「高処に安んずべきは高処に安んじ、低処に安んずべきは低処に休んぜよ！」これは、高いところは高いところに平に器物を整えて置かなくてはならない、低いところへ置くものは低いところに平に整えて置かねばならない、ということです。言われてみれば当たり前の事であります。

今朝、私は六時頃から境内の珊瑚樹の生垣に薬剤散布をしました。この作業で大事なのは、高いところを作業する脚立が要ることです。脚立は立て場所が大事で、先ず脚を安定させる、脚立の下の脚がぐらぐらすると上に上がつても何もできない。剪定の時も同じであります。四本の脚を安定させます。

今度は、上で自分の身体が安定していなければ何もできない。正に「低処低

平、高処高平」、『典座教訓』のお言葉どおりであります。

これは器物や物においてそういうであります。考へてみると、人は自分の立ち位置、境遇は夫々の人の人生によつて別々であります。しかしながら、高いところは高いところなりに、低いところは低いところなりに全く平等であります。人間といつものば、基本的には高いところも低いところもみな平等なのです。お金の所得だとかは千差万別であります。同じ区間を電車に乗る、これは平等であります。高きも低きも皆平等！まして頭の良し悪し、身体つきの違いは千差万別であります。基本的な人間の人権であるとか、性別であるとかは皆同じなのです。

それをどうして誰が差別を付けているのか？考へてみると自分が自分で差別をしていることが多い。何故、差別が出てくるのか？それは他人と比べるからです。比較するところに差別が生まれる！比較しなければ生じない。自分が劣つているとと思うところに差別が生じ、自分がこんな素晴らしいところがある、こんな立派なところがある、と思つたら差別になる。

今、この雲堂で坐つてゐる、どこに差別がありましょ？坐禅は人間の差別を取つ払い、普段己の心の中で作り上げてゐる余分なものを取つ払つて元の水準に戻す、そういうた業であります。がつしりと坐りたいものであります。

【高処は高平 低処は低平】

閑らに過ぎず

月日は多けれど

道を求むる時が

すくなき

いたず 「閑らに過ぎ」す月日は多けれど

道を求むる時ぞすくなき

道元禪師の詠まれたお歌六〇数首が伝えられております。これを集めて刊行されたものが『傘松道詠集』で、その中の一首であります。

「道を求むる時ぞすくなき」という後半の句が中心であります。道は色々な道がありますが、いまでもなく仏道でありますから、実践する道であります。それぞれ己の日常生活に対する反省的なことをお歌いになつた一首であります。日常生活への反省といいますと、一つは道の実践というもののがあります。

仏道を実践する、具体的に行うという道。今私共は坐禅をしています。これも家で毎朝きちつとやつておられる方もおりますが、これはなかなか稀有のことであつて、思い立つてやろうといつても、三日とは続かないのが現実であつて、まして一月・一年と続けられる方は非常に少ない。そうしたことに対する反省を促すお歌であります。

同時にそれだけではなくて、一日一日が飛ぶように過ぎ去っていく、そういつたことに対する不定感ということを、しみじみと味わせる内容を含むお歌であります。確かにいたずらに過ぎ」す月日は多いのです。一日の中でそういう時間も必要な時間ではあります。何か書物を読んで、目が疲れたぐつたりしたというようなとき、外へ出て深呼吸をし空を眺める、或いは山林の緑をそつと眺め、見るともなく見る。これで目が楽になり頭も又すつきりとし

てくるという経験は何方どなたもしている。

ですから、何もしないでいたずらに無為に過ぎ」す時間も、必要なこともあります。だが一日中それでは困ります。時は、物は、脱兎の如く動いて過ぎ去つて参ります。それを虚しくぼつと過ぎ」すのは勿体ない！間違いなくそう言えます。そうすると、時や時間が虚しくぼつと経過していくのを待つのではないか、私共が、その時や光、「時光」を虚しく経過させているのは自分なのだ！ということを反省し、にも拘らず今ここで坐禅をしているこの時こそ、むしろそういう虚しくすることもあるのだからこそ、大事な大事な一刻であり、重要な時であると思わずにはいられないのです。

今世情はコロナとやらで、時が止まつたような状況にあることはたくさんある。子供は別として大人ですら「遊ぶところがない」「身体を動かすところがない」「」のままではストレスに押しつぶされてしまう」というような声が毎日のように聞かれる。私共は有難いことに、坐禅することを知っている。そしてその意義の大きいことも知つてている。ならば僅かな時間でも坐つていらることは誠にありがたい事であり、代え難い時間であります。そういうことをしみじみ自覚して、「時光を虚しく」ではなく、「時光を使いこなす」時間にしたい！こう思うのであります。

「閑らに過ぎ」す月日は多けれど

道を求むる時ぞすくなき

出身は猶お易きも

脱体に道うは

心に難からざし

出身は猶お易きも 脱体に道うは心に難かるべし

『正法眼藏』とは別に道元禪師には『三百則』というものが伝えられております。これは何かといいますと、中国で禪師が見聞された禪門の有名な公案三百を集めて、修道の糧とされた。江戸時代にはこれが木版本にして印刷・出版されております。上中下百則ずつ三巻になつていて、その中の下巻の第八六番目、最初から数えれば一八六番目ですが、今申した公案であります。

俗に「鏡清雨滴の声」といわれております。この方は唐の時代の終わり頃雪峰義存せっぽうぎそんという方がおられましたが、青原行思の系統であります。その雪峰義存さんは福建省の雪峰山を中心にして名声を轟かせた方で、その下から雲門宗・法眼宗という二つの宗派が出ているくらいの、その派祖にあたる方ですからすごい豪傑ですね。その雪峰さんのお弟子さん、直弟子が鏡清道忿きょうせいどうふさん、やはり福建省の方で、「鏡清雨滴の声」という不朽の名声を發揮すると言つていいくらいの公案を残していることで、禅を学ぶものは知らない人はいないくらい有名な方であります。

この雨滴の声というのは、どう説かれたのかと言いますと、鏡清さんの所で修行していたある雲水さんが聞いたんですね。「和尚さんの心境は如何ですか?」「今、音がするね。音がするが何の音かね?」と鏡清さんの方から逆に質問した。「雨だれの音ですよ。あれは屋根から雨が滴り落ちている音です。」

すると、鏡清さん、なんて言われたかというと、「衆生は顛倒して、てんとうおれ

に迷い物を逐うお!」と言われた。一般的のものは心がひっくり返っている、間違えている。その間違いはなぜかというと、なんのことではない自分に迷つている、もの、見るもの聞くもの、そういうものにばつかり気を取られている。「雨が続いて嫌だな、コロナはあるし、いまホトトギスが鳴いているぞ、ホトギスならまだしも、カラスが来ていたはずらして困るわい。」そんなようなものにばかり心を奪われてしまって、右往左往、右顧左眄うこくさくめんしてしまって初中後迷じょちゅうい放しじやないか?

お弟子さん、それならば、「お師匠さんの心境は如何ですか?」「出身は猶お易きも、脱体に道うは心に難かるべし!」とその時に答えたというのあります。出身は身をい出す、悟りを開くことであります。心が束縛されるものから解き放たれることを出身といいます。悟ることなんか易しい。しかし、脱体を道うことは難しいぞ! 脱体といふことがこの公案の中核であります。脱体といふのは、実はその心が解き放たなれた悟りの心をそのままに表すこと、人に示すこと。体を脱する、これは大変難しいことなんだよ!

「出身は猶お易きも 脱体に道うは心に難かるべし」

谿聲可に入り月眼に到る

此の外更に何の用心をか須いん

谿聲耳に入り月眼に到る

此の外更に何の用心をか須いん

もぢ

道元禪師には漢文語錄である『永平廣錄』一〇巻というものがあります。『正法眼藏』は和文体で示されていますが、『永平廣錄』は全部漢文です。どうして漢文なのかと言えば、正式な説法である上堂での問答は、漢文で記録したものが多いからです。道元禪師にはそれが一〇巻も遺されています。第一〇巻目に偈頌というものが含まれています。漢詩です。偈頌の中に「山居」というものが六首集められていますが、その中の一首の中の終わりの二句に、「谿聲入耳月到眼 此外更須何用心」（谿聲耳に入り月眼に到る 此の外に何の用心をか須いん）とある句があります。

谷川の流れの音が耳に聞こえる、月がこうこうと照っているのが眼に映る。

これは当たり前のありふれた情景で、最後が問題なのです。私たちは五根の目と耳でもつてものを見たり聞いたりしています。五根の眼根・耳根・鼻根・舌根・身根でもつて認識し、判断し、それに対する対処が出てきます。車の運転と同じです。認識して判断して操作を行う。これが間断なく行われているわけです。

「此の外更に何の用心をか須いん」とは、ここに仏法というものが充満しているのに、仏教を求めることが仏法を学ぶことなど、このほか一體何を用いる必要があるのかという意味であります。

今私どもが坐禅をし、小鳥の声が聞こえ、笛のそよぐ音が聞こえ、風が心

地よく吹いている。こういった種々のものが仏法の現れなのです。この外に一体どういうことに仏法というものがあるのかという意味であります！そうしますと、全ての見聞するものが仏法の一々ということになるのです。

先月の「雨垂れの音」でも、悟ることは易しいが、それを表現することは大変なことであるという、鏡清さんのお言葉を申し上げた憶えがあります。道元禪師自ら、夜に坐禅をしていると谷川の水の流れの音が聞こえ、月の光がさしこんでくるのが目にとまる。これ以外に仏法はないんだ、すべてが仏法を説きまくっているんだ！ということになります。それを私どもは忽然としていると何もわからない。ただ暑いの寒いの風が強いのなどだけを気にしている。自分中心に自分の五感を凝らしているに過ぎない。このようなちっぽけな一人の人間の慮りなどには関係なく、真美真如の働きは、大河の流れのように、常に真実を教えている。これが仏法なのです。

ならば、仏法とは求めたってそこら中に転がっている訳で、そこから仏法を求めて行くことが禅であり、仏教を信じ切ることになります。いやしくも坐禅をしている以上、一瞬たりとも疎かにせず、聞こえてくる声、空気の冷たさ、そういうものが掛け替えのないものであるということを味わいたいものであります。

【谿聲耳に入り月眼に到る】

此の外更に何の用心をか須いん

坐禪の中に於りて
衆生を忘れず
衆生を捨てず
乃至昆虫にまでも
常に慈悲を給ひ

坐禪の中に於いて衆生を忘れず

衆生を捨てず 乃至昆虫にまでも常に慈悲を給い

道元禪師が中国に渡られ、あちらで修行された時期は宝慶年間(ほうきょう)であります。

その時に中国で、禪師が修行の要となることを書き残しておいた書物が今日まで伝えられており、それが『宝慶記』と名付けられています。その中有名な慈悲の坐禪が説かれております。坐禪は自分のための坐禪ではあってはならない、それは小乗仏教の坐禪であり、本当の坐禪ではない。そうではなく、一切衆生を忘れることなく、どんな人をも忘れてはならない。そして一匹の昆虫に至るまで慈悲の心をもつて坐禪をしなくてはならない！と。

これは、私共現今(けんげん)の者にとって誠に得難い、素晴らしい教えであります。

坐禪は、まずご家族のご理解ご支援がなくては出来ない。車に乗つてこられる方は、車というもののおかげを被つてている。車は誰が整備しているのか、その燃料は誰が作り出しているのか、そう考えていきますと無数の一般民衆の方々のおかげによって今坐禪が出来る、これはまず間違いないことでありまして、一般衆生の恩(おん)というものが、山のように自分の背後にうず高くあるのであります。

いま、クーラーが効いて涼しい陽気になつております。クーラーを作る人、

据え付ける人、電力を供給する人、ここにもまた、山のような一般人の恩が積もり積もつていて。こういうことを考えますと、坐禪ということに限つても、途方もない多くの人々のおかげで坐禪が出来るわけであります。

すると、そういう人々のことを決して忘れてはならない！

ところが、「坐禪は色々なものを持たなければならん。己一人の行であるから、ただ所縁を放捨し万事を休息して淡々と坐るだけいいんだ」というふうな理解をしがちであります。私共の一人くの坐禪に、無限の恩というものを受けているという事実があるということを、忘れてはならないのです。そうでなかつたら、それはもう得手勝手な自己流の小乗仏教の坐禪である。小乗の坐禪は自分だけ良ければいい。極端に言うとそういういた行である。そして自分だけ最終的に悟りを開ければ良いんだ。

それではならないというお示しが『宝慶記』にいみじくも語られている。これは本当にありがたいことであります。私共はともすれば、他人、人様、一般の方々、衆生、なんていうことは関係のない坐禪だと、こう思つてゐるし、また実践されているくらいがありますが、決してそうではないんだといふことを禪師は懇々と諭されております。誠にありがたい教えであります。衆生を忘れず、衆生を捨てず、昆虫に至るまで、その(おん)恩を受けていることを忘れまじという教えであります。

「坐禪の中に於いて衆生を忘れず

衆生を捨てず 乃至昆虫にまでも常に慈悲を給い」

一 波 纔に動けば

萬 波 隨つて來り

心 識 續に起れば

萬 法 競い来る

いっぱわづか
一波纔に動けば萬波随つて來り

しんしきわづか
心識纔に起れば萬法競い来る

ばんぱしたが
まんぼうきぞ
きた
心識纔に起れば萬法競い来る

これは總持寺の御開山 瑩山禪師様の著わされた『坐禪用心記』の中の一節であります。

瑩山禪師は道元禪師から第四代目の法孫の方であります。その禪法、禪の宗旨は、道元禪師の宗教を根幹として抑えられた上に、一般の方々に広く坐禪を、或いは禪のエッセンスを伝えようとされた方であります。『坐禪用心記』も『普勸坐禪義』の精神をキチッと抑えられた上で、もっと広く大勢の方々に分かりやすく坐禪を説こうとされた撰述書であります。

その中に「一波纔に動けば萬波隨つて來り、心識纔に起れば萬法競い来る」というお示しがござります。

「一波纔に動けば…」というのは、一つの波がわずかに動けば満の波がそれに従つて来たるという意味です。池の水を動かすには、池の中に棒を一本立ててそれをぐるぐる回すと、池全体の水がゆつさゆつさと自然に回りだす。それと同じような意味であります。一つの波でもわずかに動かすことによつて沢山の波が起つてきて動き出す。

それと同じように後半は「心識纔に起れば萬法競い來たる」、こうござります。心識とは心と知識、私共は迷いの心でもつて色々なもの、形や色彩や大きさ、そういうものを認識するわけであります。迷いの心というと人を侮蔑したように聞こえますが、そうではなくて悟つていない者は皆迷つ

ているというのが仏教の表現であります。その迷いの心で見ると様々なものが、様々な形や色やいろいろな違いによつて目に映つて参ります。違ひがあるからこそ認識しているわけであります。そういう心が少しでも起これば全てのものがどんどん分かつてくる、私共が全て迷いの分別によつて形や色を見るのは事実であるが、それでは本来的なものを見失つてしまつ！ 本来的な真つ新な本筋を見ていくためには心識は起こさない方がよい！ 全く動かない心動じない心、これは静まつた状態です。静まつた心でものを見聞きますると物事の本質がありありと見えできます。

そういうことを大切にする坐禪は、正にありとあらゆる考え方を色眼鏡を外して、真つ新な目や耳や神経でもつてその働きを大切にする行であります。ですから心識わずかにも起らない、これが坐禪であります。諸々の心識の有様によつて我々はむしろ自分で問題を抱え、悩みや苦しみや嫌なことをどんどん引き入れてしまつてゐる。それを止めましょう、それが坐禪であります。

「一波纔に動けば萬波隨つて來り 心識纔に起れば萬法競い来る」

坐禪はそういうことを止める行であります。自分の本性本来性、そういうものを丸出しにした坐禪を行いたいものであります。

仏道は

初發心のときも仏道なり

成正覺のときも仏道なり

初中後ともに仏道なり

仏道は 初発心のときも仏道なり

しょちゅう

成正覚のときも仏道なり 初中後ともに仏道なり

『正法眼藏』「説心説性」の巻の一説であります。仏道というものは、「これは仏教の行いを実践することであります。その仏道というものは、「初発心のときも仏道なり」、初めて発心する、やろうという気構えを持って実践を始める時、いわゆる初心の仏道修行の時であります。初発心がなくて仏道を続いている方はいない。「よし、今日から、いまからこれをやろう」という心構えを持って坐禅を始めたに相違ない。

仏道修行においては初発心が一番肝要であると道元禅師は仰っておられます。その初発心の時も仏道である。言うまでもないことであります。敢えて仏道ということを重ねておられる。そして、「成正覚のときも仏道なり。」成正覚というのは、正覚を成^{じよう}す。平たく言うと悟りを開く。仏道を続け極めて悟りという大いなる心の開放され、真実の道とピタリ一つになつた体験、これが成正覚であります。

それから、「初中後ともに仏道なり」。このように初めも真ん中もあとも、初中後というのは、常にいつでもという意味であります。初めも真ん中もお終いも常に仏道であります。これが仏道というものの方なんだ！と。

まさしく道元禅師の道を歩む姿・姿勢、これを表しているわけであります。

私共は様々な仏道修行のあり方を知っております。読経するのも仏道、坐禅はいうまでもない、作務も仏道である。皆様方も毎日朝起きてから夜休むま

での間なにかの作務をされていると思います。それも仏道である。食事は三回とっているのが普通、これも仏道である。あるいは運動をする、仏道である。そのように仏道は生活三昧、ありとあらゆる生活の場、仕事はもちろんのときも仏道なり」、初めて発心する、やろうという気構えを持って実践を始める時、いわゆる初心の仏道修行の時であります。初発心がなくて仏道を続いている方はいない。「よし、今日から、いまからこれをやろう」という

道元禅師は、「道は無窮なり、悟りてもなお行道すべき」と言っておられます。悟つたつて悟りがお終いの最終的な目標じやないんだ。悟つてもまだ行道しなくてはならない。目的を達成するための行道ではない。歩む姿がそのままが行道である。それは無窮の歩みである。無限の努力である。

こう簡単に申しますが、実は難しい。そんなことをやつていたら息が詰まってしまう。作務のときは作務だ。食事をする時は食事を頂けばいいんだ。それは理屈であります。確かに日常三昧のなかではそうです。しかし、道を求めるながら歩むという姿勢は、それではならない。食事をするときも、お手洗いを使う時も、これは道を行じているんだというようなことが背後にはくてはならない！ そうすれば自然とキチツとした食事になる、作務になる。自分は仏教をもとめて行じているものであるという自覚が背後にあれば、やることなすこと行である！ 坐禅堂の中でいやしくも坐禅をしているのは、それが凝縮された形であります。

「仏道は 初発心のときも仏道なり

成正覚のときも仏道なり 初中後ともに仏道なり」

仏祖は

身心如一なるがゆゑに

一句兩句 みな仏祖の

あたたかなる身心なり

仏祖は身心如一なるがゆゑに、

一句両句 みな仏祖のあたたかなる身心なり

『正法眼藏』「行持」の巻の下巻の末尾にみえるお言葉であります。行持の巻は、仏祖といわれる方々の行跡やお言葉といったものを、三十四人の方から集められて編集されている巻であります。

今申し上げたお言葉は、下巻の一番最後で、道元禅師のお師匠様である如淨禅師の条にあります。如淨禅師の言動、行跡が一番長い。一番最初は達磨大師の行跡で、これも長い。インドから中国にやってきて、禪を始めた達磨大師なくして禪はないということから、大師の行跡も非常に長い。そして自分の師である如淨禅師から正伝の仏法をお受け頂かなかつたら自分の仏法はない、こういう道元禅師の氣概、仏法に対する見方、そういうつたものから如淨禅師の条も非常に長く素晴らしい。その最後の如淨禅師の条の中に、今のお言葉があります。

「仏祖は身心如一なるがゆゑに」、ずっと連ねて見てきた仏祖方の有様というものは「身心如一」、「身と心」要するに「やること為すこととの動作と心」があつかも一つである。一つであるが為に「一句両句皆仏祖のあたたかなる身心なり」であります！

仏祖によって発せられた一句両句のお言葉はみんな例外なく、仏祖の血の通った身体と心である。今、目の前におられるような生身の血の通った身体と心から発せられたお言葉であり行跡である。だから我々は、そのように受

け取つて我が身心に置換えなければならないのである！ と。

正に行持の巻の一番終わりの締め括りに相応しいお言葉であり、また、行持の巻でずっと述べられている仏祖の方の身心を、道元禅師がそのように受け取つておられた、ということが良くわかるお言葉であります。

私共は、『正法眼藏』を拝読したり、お祖師様方の書かれたものを見、その行跡を知つて、一言二言を学び取つておりますが、その学び方、受取り方がそのようでなければならぬというのであります。『參同契』『宝鏡三昧』も皆同じであります。お一人お一人のあたたかなる身心である血の通つた、今、目前にあつて話をされたこととして受け取らなくてはならない。仏祖のお言葉や行跡の学び方の根本が語られている。ですから『正法眼藏』のどこに説かれているか述べられているか、常に参究していますが、それは今日の前で一対一で大きな声で話されているように受け取らなくてはならない！コトンコトンと心臓の鼓動が聞こえてくるような状態でこれを受け取らなくてはならない。

私共、皆様方が『正法眼藏』を拝読するとき、或いはお祖師様方の一句両句のお言葉や行跡を知るときに、このような受け取り方をしなければならない。そういった基本的なお示しをされたお言葉であります。

「仏祖は身心如一なるがゆゑに」

一句両句 みな仏祖のあたたかなる身心なり」

初発心のとき、も仏道なり

成正覚のとき、も仏道なり

初発心のときも仏道なり 成正覚のときも仏道なり

『正法眼藏』「説心説性」の巻の一説であります。「初発心」というのは初めて菩提心を起こした時、仏道実践を行おうと決めた時であります。皆様方も坐禅を始めた時には必ずなにかの動機があつて初めは敢えてやられたはずであります。ただなんとなくという人もいるかもしれませんのが、ほとんどはやはり一大決心をされて坐禅を始めたのではないかと思います。その時を初発心といいます。初めての菩提心を起こすこと。

お釈迦様は、お悟りを開かれるのであります、初めはやはり一大決意を持たれてお城を出られた。「四門出遊」なんていうことが言われて、お城からその外へ通じる四つの門があつて、生老病死、生の姿を見た、老の姿を見た、病人を見た、死ぬ人を見た、その四つの門からそれぞれ見て、そして出家をされた。そういうことをいかに克服するかということを目指された。

初発心のときも仏道であると。初発心、やる気を起こしてその坐禅を始めたということは仏道の実践であります。他のことではない。仏道は仏教的なことを実践することを言います。道を歩くというように歩くこと、仏道実践は行うこと、行ずるということに、これにウェイトがかかっております。

そして、「成正覚のときも仏道なり。」成正覚、正覚を成す正いお悟りを得るということ、これも仏道である。仏道の大きな目標というものが眞実の世界に目覚める。己のことも含めてこの世の中のすべての眞実、あり方、

これを見極めるということであり、そこには自分も当然含まれているわけですか。己も他人もすべて含まれていて。そういうものがなぜ一体ここに生きているのか、息をしているのか、生存しつづけているのか、そしてそれは何のためにあるのか。こういったことを見極める。見極めるということは、その本質を全身でみることであります。これを成正覚、正しい教えを開かれた。釈尊の場合には、それが二月八日の朝、明星を見た時と伝えられております。一般の方々はそういうことを全然知らない。知らないからこそ、私はそうしたことを縁のある人にはいつも語り継げなければならない。今日、世界中の仏教の寺々では、二月八日を成道の日と名付けて、何らかのお祝いの儀式を行つてゐる訳であります。なぜ祝うのか。それはもう釈尊がお悟りを開かれたからこそ、後に仏教というものが起こり、それが伝えられる事になったからであります。こういう意味では「三仏忌」と言いますが、お釈迦様がお生まれになつた日、亡くなられた日、そしてこの成道の日、この中では成道の日が一番本当はありがたいということになる訳であります。

本日、日曜日を期して当山では成道会を行い、今日はいみじくも三八回目ということであります。この聖なる日に坐つていらるるということは、誠にお互いに幸せであります。そういう日にふさわしい道元禪師のお言葉を、自分のものに、お互いにして参りたいと思う次第であります。

【初発心のときも仏道なり 成正覚のときも仏道なり】

無常迅速なり

生死事大なり

無常迅速なり 生死事大なり

しょうじ

『正法眼藏隨聞記』の巻にあります有名なお言葉であります。言葉は分かり易いことであります。無常というものは誠に迅速である、飛ぶようである。それと同時に、人間の生死ということは一大事因縁である、最大の重大なことである。誰でもうなづくお言葉であります。しかし、頭でうなづけることと、体でドスンと感じることは違う。ここが問題であります。

自分の起居動作を通じて無常迅速を本当に受け止めているかどうか！己の生まれてから死ぬまでの生死というものの真実のあり方を極めるということを通じて、そのことは重大なことであると受け止めているかどうか！ということが問題なのであります。これが仏教的に重要なことであります。仏教は思想ではない。哲学ではありません。常に己の起居動作生活万端を通じてそれが自分の体でもって肯^{うけが}えられるか、肯えられないか、これを問題とするのが仏教であり、禅であります。

実際の現象、有様は速やかに移ろいで行つて、人命は瞬間たりとも留まることがないというのが「無常迅速」であります。人間の生まれたときから死ぬ時までの真実の有様を、いろいろな書物や見聞によつて知ることは誰でも出来ますが、己の毎日毎日の起居動作生活を通じてその真実相を極めているかどうか。それを問題にし、それを極めていくというのがこの『隨聞記』の教えであります。考へてみれば我々の命は明日どうなるか分からぬといふのが現実であります。

今、コロナのことで誰しも大変な思いをされていることは事実であります。が、この夏は毎年のように説法をお願いした説教師に連絡して、「今年はコロナであるから、ご遠慮していただくことにします」、そういうことを申したら、説教師さんの方から意外な言葉が返ってきた。「いや私の方からそれは取り下げをお願いしたいと思つてた。私のすぐそばの縁の深い寺の住職がコロナに感染して死亡したんだ。」その寺は門を締め、来る来客に事実を知らせ、中に入れません。そういうことを何週間か続けた。出入りせず蟄居の状態になり、いま二週間目に入っています、と。

この龍泉院にも毎年お盆においてになる方が、「今年は行かれません。長男がコロナに感染したんです。」そこで実はこの八月の参禅会の日には、その方がお参りに来たらばどうしようか、ということで随分頭を悩ましたんです。毎日くっコロナで何百何千の人が感染しているということを、マスク^{らっきょ}ミミを通じて我々は知つてはいる。しかし、いざ当事者となつた時、どう対処しどうこれをクリアしてくれか、改めて思いやられた夏であります。

今まで、それに倍する人達が増えております。皆様方どうぞ、無常迅速であります。生死事大であります。これを他山の石ではなくご自分の起居動作、毎日の生活に即して受け止め適切な対処をとつて頂きたいと思つ次第であります。

「無常迅速なり 生死事大なり」

龍泉院参禅会簡介

【参禅】

一、月例参禅会

日程 每月第四日曜午前九時(初参加者は八時半)来山、正午解散
坐禅 口宣・坐禅・経行・坐禅の順(坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分)
講義 木版三通・開經偈・『正法眼藏』の提唱
座談 自己紹介・お知らせ・喫茶

一、自由参禅

日程 每月第一日曜と第二土曜午前九時から正午まで
(二月と三月の第一日曜・第二土曜、六月の第一日曜、一二月の第一日曜は休み)

坐禅 九時から一一時までこの間入退堂は自由

作務 一一時から正午まで坐禅堂清掃など

※会費無料、性別・年齢など一切不問、初心者には懇切に指導

【行事】

一、一日接心

坐禅四炷と提唱など、本年は六月六日(日)

二、成道会

坐禅二炷・法要・問答・法話・点心など、本年は一二月五日(日)午前九時より

一、他の行事

涅槃会(一月十五日)と花まつり(四月八日)は法要と法話と坐禅一炷、午後二時より

施食会(八月十六日)手伝い。歳末助け合い托鉢(本年は一二月一二日(日)午後一時より)

歲末煤払い(二月例会後)

一、作務

毎月第一と第三金曜午前九時から正午まで境内の掃除等
及び第一日曜と第二土曜の午前一一時から正午まで

※ 下記簡介は平常時における会の活動状況(予定)であります
2021年からはコロナ禍のため休止または規模を縮小した活動となっています。

【刊行】

一、『明珠』 一、『口宣』

年二回(四月八日と一〇月五日に発行)、会報誌

年一回(四月に発行)、月例会と一日接心・成道会の各口宣のまとめ

【ウェブサイト <http://www.ryuseinji.org/>】

天德山龍泉院
東堂 椎名宏雄老師
口 宣
<第二三号>

令和3年4月吉日
発行 龍泉院参禪会
毛筆 坂牧 郁子
〒270-1456 柏市泉 81
TEL 04-7191-1609
<http://www.ryusenin.org/>